

# 赤い糸の伝説 (続)

## 古田島洋介\*

前回の拙文(本紀要第一号、七三―八一頁)で扱った「赤い糸の伝説」について再論してみたい。今回は、当該伝説の初出と目される『続玄怪録』巻四「定婚店」(『太平広記』巻一五九所載)の類話を紹介する。何を以て類話とするかは暫く問わない。差し当たり、以下に掲げる話について言えば、話の筋の類似、あるいは共通要素としての男女を結びつける「繩」の登場ということになる。明確な定義なしに「類話」と言い立てるのも気が引けるが、当面は常識に寄りかかりつつ、なるべく広い意味に解しておき、定義を必要とするときが至れば、そこで改めて考えようとの心積もりである。

ただし、以下に記す類話はいずれも中国または日本の話である。不勉強にして、朝鮮半島やインド、またはヨーロッパなどに類話が存在するかどうかを未だ詳らかにしない。お気付きの方がいらしたら、切

に御教示を願う次第である。

なお、中国の説話については原文や書下し文を省き、すべて口語訳のみで示す。一つには紙幅の関係上、二つには話として一気に読み通せることを目指さんがためである。

### 一 中国の類話——その一

『太平広記』巻一六〇に「灌園嬰女」と題する話が見える。訳せば「農家の幼い娘」とでもなろうか。それは次のような話である。

\*

\*

\*

さきごろ一人の秀才がいた。二〇歳になったので、なんとか早く結婚相手を見つけたと思っていた。けれども、あれこれ声をかけ、人を介して縁談のつてを求めたが、どうしても結婚話がまとまらない。そこで、よく当たると評判の占い師のもとを訪れ、結婚相手を決めようとした。

占い師はこう言った。

「男女は宿縁によって夫婦となるもの。おまえの妻となるべき女は、まだ数えて二歳になったばかりじゃ。」

秀才はたずねた。

「その女性はどこの州のどこの県にいますか? 姓はなんというのでしょうか?」

「滑州の城郭の南におるの。姓は某という。父母は農業をやっておる。その一人娘が、おまえのつれあいとなる女じゃ。」

その秀才は自分の家柄にも自身の才能にも誇りを持ち、尊い家柄の女性をさがしていた。ところが、結婚相手が農家の娘だと言われたため、憂鬱な気分になってしまった。

しかし、占い師の言葉を完全に信じたわけではない。とうとう自ら滑州に出かけて事の真偽を確かめることにした。

さて、滑州に着くと、城郭の南を訪ねまわった。すると、果して野菜畑があり、年老いた農夫が働いている。姓を問うと、占い師の言ったとおりの姓であった。秀才はさらにたずねた。

「息子さんはいるのかね？」

「いや、娘が一人いるだけですわい。やっと二歳になったばかりです。」

なにもかも占い師の言葉どおりなので、秀才はますます気分がふさいだ。

ついに秀才はただならぬ決心をし、ある日、その幼い女の子の両親が出かけたのを見はからって、その家に近づいていった。そして、女の子をおびきよせ、自分のほうに来させると、いきなり細い針を女の子の頂門に突き刺した。まもなく滑台〔地名、滑州の治〕を立ち去ったが、てっきり女の子は死んだものとばかり思っていた。

しかし、女の子はむごたらしい目にはあったが、なんとか無事に回復した。

その後、女の子が五、六歳のときに、両親は死んでしまった。地元の県の役人は、女の子に養い手がなくなったことを按察使に報告した。すると按察使は憐れに思っ、女の子を引き取り、自分の手で育ててやった。

一、二年すると、按察使はその女の子がとても賢いのに心を動かされ、正式に自分の娘として育てることにし、実の娘のように可愛がった。その後、按察使は他の州に任地が変わり、そのあいだに娘も成長していった。

一方、かつて占い師のもとを訪れた秀才は、すでに科挙に合格し、記録係になっていたが、ふだんは按察使に会う機会がなかった。そこで、たまたま按察使が任地へ赴く途中、名刺を差し出して謁見することになった。

按察使は秀才の風貌を一目見ただけで気に入り、厚くもてなした。あれこれ問ううちに、結婚に話が及ぶと、まだ独り身であると言う。

そこで按察使は、秀才が官吏の家の出であることを知り、また人柄も申し分なかったので、自分の娘と目合わせようと思ひ、然るべき筋から内々に秀才の意向を問い質した。秀才は喜んで申し出を受け、ほどなく按察使の娘と結婚した。按察使は秀才にたっぷり祝いの品物を贈り、娘も稀に見るような美人であった。秀才は望外の結婚をとげたことを喜ぶ一方で、占い師の言葉を思い出し、よくもあんなでたらめが言えたものだとの心ななかで占い師に毒づいた。

ところが、その後、陰鬱な天気になるたびに、秀才の妻は頭痛をもよおし、そんな状態が何年も続いた。そこで名医と評判の医者に診察してもらった。

医者はこう言った。

「頭痛のもとは、頂門と脳のあいだにありますな。」

医者が膏薬を頭のとっぺんに張りつけると、まもなく一本の針が潰れて出てきた。すると、妻の頭痛はすっかり治ってしまった。

秀才は胸さわぎがして、ひそかに按察使の親戚や昔なじみのもとを訪れ、妻の身元を問い質した。そして、ついに例の農夫の娘だったことを突き止め、改めて占い師の言葉が正しかったことを身に染みて悟ったのである。

以上は、かつて襄州従事の陸憲が語った話である。

一読して「定婚店」と同工異曲の筋立てだとわかるだろう。なかなか結婚できぬ男が、ある幼い女の子こそ未来の妻だと告げられる。しかし、自分にとって不本意な結婚相手であるため、その幼い女の子を殺そうとする。ところが、首尾よく運命を逃れて結婚できたと思いきや、実は定められた女性と夫婦になっていたという筋書きである。細かい相違は数多く見出されるが、両者が同じ発想の話型であることに異論の余地はあるまい。

右の話の末尾の出典注記には、「『玉堂閑話』に出づ」とある。『玉堂閑話』は、范資の著。范資は五代十国時代の人物であるから、『玉堂閑話』の成った年代は、『定婚店』を載せる『続玄怪録』よりも遅いことになる。ただし、話の舞台そのもの年代については、よくわからない。話末に「襄州従事の陸憲」云々とあるが、その陸憲なる人物については目下のところ未詳である。

なお、〈赤い糸〉こそ登場しないが、占い師が夫婦となるべき男女の結びつきを「宿縁」といつている点は注目すべきだろう。この話をそのまま「定婚店」に重ね合わせてみれば、「宿縁」すなわち〈赤い糸〉ということになる。抽象的な「宿縁」の観念を具象化してみせたのが〈赤い糸〉だったのであろうか。または逆に、具象的な〈赤い糸〉を抽象化して表現したのが「宿縁」の語であったのか。あるいは、両者はまったく別個に語り継がれていたのか。その間の事情を俄に明言することはできないが、少なくとも後代において〈赤い糸Ⅱ縁〉の図式が成り立ってゆくのを想うとき、この二つの話で早くも「宿縁」と〈赤い糸〉が相等しい位置を占めている点は興味を引く。ちなみに、この「灌園嬰女」によく似た話、したがって〈赤い糸Ⅱ

の伝説の類話と称すべき物語が日本の『今昔物語』に見える。次にそれを紹介してみよう。

## 二 日本の類話——その一

『今昔物語』卷三一「湛慶阿闍梨還俗為高向公輔語（湛慶阿闍梨、還俗して高向公輔と為ること）」第三の前半に、湛慶にまつわる同じような筋立ての話が見える。原文は、現在から過去にさかのぼり、再び現在にもどる叙述形式になっているが、今、引用の便宜上、過去から現在に至るよう関係部分を整理して、左に要約してみることとする。

湛慶は不動明王に帰依し、熱心に仏道修行にはげんでいた。ところが、あるとき夢のなかに不動明王が現れて、こう告げた。

「おまえは前世の因縁で、尾張の国の某という者の娘と夫婦になるだろう。」

むろん、仏に仕える身で女と通じるわけにはゆかぬ。そこで湛慶は、夢のお告げが実現せぬよう、その相手の女を殺してしまおうと決心し、尾張に向かって旅立った。

尾張に着いて、夢のなかで聞いた所へ行ってみると、果して某という者がいた。某には一人娘がおり、年は十歳ばかり。湛慶は、それこそ当の女だと思つて、翌日、周囲に誰もいないのを見計らい、女の子の首をかき切つて逃げ去つた。

その後、湛慶は、藤原良房が病気になるたとき、治療の祈禱に召しだされ、良房の病気が治つてからも、しばらくその屋敷にとどまつた。そして、膳を運んできた若い女に情を感じ、その女と深い仲にな

ってしまった。

やがて床を共にしていたとき、女の首にさわってみると、大きな傷跡がある。湛慶は女にわけをたずねた。

「私は尾張の国の某という者の娘です。幼いころ、暴漢に襲われて首をかき切られました。けれども、誰かが傷を治して首をつなげてくれたのです。その後、御縁があつて、このお屋敷に参るようになりました。」

これを聞いた湛慶は、女と前世からの深い因縁があつて、それを不動明王がお示しくくださったのだと知り、泣きながら自分がその暴漢だと告白した。女も深く感動し、二人はそのまま夫婦になった。

\* \* \*

「灌園嬰女」と実によく似た話である。仏僧が女犯を避けんがために敢えて殺生戒を破るのも奇妙な話で、しかも首をかき切るとは物騒このうえないが、細かい点では種々の相違を残しつつも、全体の話の展開が酷似していることは否めまい。かつて芳賀矢一は、この話の類語として「定婚店」を指摘したが、話の展開の類似という点では、むしろ先の「灌園嬰女」のほうが似ているかもしれない。「灌園嬰女」に見られた「宿縁」の語が、この話で「前世の因縁」（原文「前生ノ縁」）「前世からの深い因縁」（原文「深キ宿世」）と記されている点も、両者の接近を印象づけるのに一役買っている。

もつとも、前者『玉堂閑話』の「灌園嬰女」にせよ、後者『今昔物語』の「湛慶阿闍梨……」にせよ、焦点の「赤い糸」そのものが登場しないのは、類話とはいえず、いささか不満が残る。

そこで次に「赤い糸」ならぬ「細い縄」が現れる話を見てみよう。

### 三 中国の類話——その二

『太平広記』卷三二八に「閻庚」と題する話があり、そのなかに「細い縄」が登場して、男女を結ぶ役割を果たすことになっている。色こそ赤とは指定されていないが、「細い縄」に結ばれた男女が結婚に至るといふ発想は、「赤い糸」を想わせるに十分であろう。以下、少々長くなるが、全訳を示すことにする。

\* \* \*

張仁亶は幼いときから貧乏で、いつも洛陽の北市に仮住まいしていたが、その北市に閻庚という者がいた。この閻庚は馬牙の荀子の息子で、善行を好み、善いことをしたと言つては自分でうれしがっていた。閻庚は張仁亶の人徳を慕い、いつでも父親の財産を盗みだしては、張仁亶に着る物や食べ物を与え、そんな状態がもう何年も続いていた。

父の荀子は息子の閻庚が家の財産を持ち出すのに気づくたびに叱つて言った。

「おまえは商売人のせがれ、あの張仁亶さんは学問のある立派な人物。おまえなぞ相手にしてくれるはずもない。それなのに、おまえときたら、我が家の財産を持ち出して張仁亶さんに貢いでいる。浪費もいところだ。」

張仁亶はその言葉を人づてに耳にして、閻庚に言った。

「私のために君に迷惑をかけてしまった。私はこれから白鹿山に行こうと思う。いろいろ骨を折って助けてくれたことは決して忘れないよ。」

閻庚はすでに張仁亶を兄と慕って久しかったので、別れるのかと思うとやりきれない気持ちになり、張仁亶にこう言った。

「ちようど学問をしたいと考えていたところです。そういうことから、ぜひ一緒に行かせてください。」

張仁亶は閻庚の学問に対する志を貴重なものと思い、一緒に来てもらいと言った。そこで閻庚は父親に内緒で驢馬と食料を用意し、張仁亶と一緒に旅立った。

二人は六日かけて陳留に到着し、宿屋に泊まった。張仁亶は宿屋の奥の部屋に宿泊したが、部屋の外に腰掛けがあった。しばらくすると一人の旅人がやってきて、その腰掛けに腰をおろした。

張仁亶はその旅人の目つきがただならぬのを見て取ると、閻庚に言い付けて宿屋の外から壺入りの酒を買ってこさせ、旅人のところへ行った。張仁亶はまず旅人に酒をすすめたが、旅人は遠慮して受けようとしな。しかし、張仁亶が強いてすすめると、それではということと、ともに酒を飲んだ。酔いがまわって酒の席が盛り上がったため、張仁亶と旅人は同じ部屋で寝ることになった。

夜半、張仁亶が旅人の荷物の中身をたずねると、旅人はこう答えた。

「実は、わたしは人間ではない。冥界の役人じゃ。冥界の命令で、河北一帯の婚姻を管轄している。結婚する男女の脚を結ぶのがわしの役目なのだ。」

旅人の手荷物を開いてのぞき込むと、袋の中に入っている細い縄が見えたので、張仁亶は、なるほど嘘ではないかと納得した。そこで、自分がどのくらい出世して、何歳まで生きられるのか聞いてみた。冥界の役人は言った。

「貴公は八十数歳まで生き、官吏として最高の位まで昇りつめるだろう。」

張仁亶は閻庚のこともたずねてみた。冥界の役人はこう答えた。

「閻庚は寿命が短く、地位にも俸禄にも恵まれまい。」

張仁亶は、どうすれば閻庚に長寿と栄達をもたらしてやれるかと聞くと、冥界の役人は言った。

「もしかすると、閻庚の脚を美人の脚と結んで結婚させれば、運が向いて、地位や俸禄を手に入れることができるじやろう。そういうえば、河北の白鹿山から百数里のところの一つの村があり、そこにいる王という人物の娘はすこぶる貴人の相に恵まれている。つい先日、すでにある男と縄で結んで結婚することにしてしまったが、なんとかしてやらねばというのなら、縄をその男から解いて、閻庚の脚に結びなおし、閻庚がその娘と結婚して高い身分につけるようにしてやろう。とにかく旅を急ぐがよい。その村に到着しようというころ、大雨が降ってすぶぬれになるはずだ。それがわしの話の嘘ではない証拠じゃと思ってくれ。」

こう言うと、冥界の役人は別れを告げて立ち去った。

張仁亶と閻庚は六、七日のあいだ旅を続け、村に着こうとしたとき、大雨にあつて服がすぶぬれになった。そこで村の西にある王氏の家に行き、泊めてもらおうと門をたたいた。しばらくして、やつと王氏が姿を現わし、二人に詫びて言った。

「家でちよつと不愉快な事がありまして、ずいぶんお待ちしてしまいました。どうぞ誤解なさらないでください。」

張仁亶がわけをたずねると、王氏はこう答えた。

「私には一人娘がおりまして、すでに西の村の張家に嫁ぐことに決まっております。実は今日が結納の日でしたが、あるうにか、先方の結納品があまりに少なかつたのです。これでは私どもを軽んじた

も同然のこと。そんなわけで、結婚話を取りやめにしようと思ったのです。」

張仁亶と閻庚は顔を合わせて、かすかに笑みを浮かべた。

その後、二人は数日のあいだ王家に泊まったが、主人の王氏は二人の逗留をたいそう喜んだ。そこで張仁亶は王氏にこう話を切りだした。

「この閻君は私の従弟で、青年でありながら学問に志を抱いておりますが、まだ独り身です。」

王氏は、自分のような田舎者の娘ではとことわったが、顔には喜びの色が浮かんでいた。張仁亶があくまで閻庚との結婚をすすめると、そこまで言うのならばと、王氏もついに娘を閻庚に嫁がせることに同意した。馬や驢馬をはじめ、道中の必要にと用意していた金品を結婚資金として、数日後、二人は結婚した。

張仁亶は閻庚をそのまま王氏の家に留め、一人で旅を続けることにした。王氏は贈り物をして、旅立つ張仁亶を見送った。

その後、数年して、張仁亶は侍御史および州長史、御史大夫を歴任して政治を司るようになった。後に閻庚も出世を続けて張仁亶と助け合い、ついにある州の長官にまで昇進したのだった。

\* \* \*

この話の末尾の出典注記には「『広異記』に出づ」とある。『広異記』は唐代の志怪小説集で、著者は戴孚。『文苑英華』巻七三七所載の顧況「戴氏『広異記』序」によれば、戴孚は顧況と同時代人であり、至徳年間（七五六―七五八）の初めに科挙に及第し、五七歳で世を去ったという。したがって『広異記』は、例の「定婚店」を載せる

李諒（字は復言、七七五―八三三<sup>3</sup>）の『続玄怪録』よりも早い時期の書ということになる。成書年代が必ずしも説話形成の時期を体現しているとも限らぬゆえ、ただちに当該「閻庚」の「細い繩」のほうが「定婚店」の「赤繩子」より古いとは断言できない。しかし、少なくとも、「赤い糸」を動かぬ運命と観ずる「定婚店」に先立って、「細い繩」を結び替える話が世に現われていた事実は興味深いものがある。

特に注意すべきは、「旅人の手荷物を開いてのぞき込むと、袋の中に入っている細い繩が見えたので、張仁亶は、なるほど嘘ではないかと納得した」（原文「仁亶開視其衣装、見袋中細繩、方信焉」という一節ではあるまいか。これは、冥界の役人が結婚する男女の脚を繩で結ぶことを、張仁亶が前以て知っていたかのような書きぶりである。そうでなければ、張仁亶が「細い繩」について何かたずねてもよさそうなのだ。張仁亶は、冥界の役人が男女の脚を「細い繩」で結ぶと自体については、なんら疑問を持っていないかのように思われる。すなわち、確証こそないものの、結婚に至る男女の脚は冥界の役人によって繩で結ばれているという話は、この「閻庚」の話が登場する以前から、すでに広く巷間に普及していたのではないかと推測されるのである。

#### 四 日本の類話——その二

最後に、気分を変えて日本の昔話に目を向けてみよう。『日本昔話通観』第二六巻「沖繩」篇、三〇―三二頁に次のような話が見える。字句は梗概である。

昔、唐の国でのこと。ある学問を志す青年が都へのぼる途中、木の下で休んでいると、一人の老人が現われた。話をしているうちに、青年は結婚について聞いてみた。

「結婚する男女が縁で結ばれているというのは本当でしょうか？」

「その通り。結婚すべき男女は、生まれてから互いに足の指の先を赤い糸で結ばれるのじゃ。」

「では、私と縁が結ばれているのは、どの女性なのでしょう？」

「ほら、向こうから歩いてくるのが、おまえと赤い糸で結ばれている女性じゃよ。」

青年が見ると、みすばらしい色黒の女だった。いつのまにか老人は姿を消していたが、青年はそんな女と結婚したくなかったので、殺してしまおうと、刃を投げつけ、女の腰を斬って逃げ去った。

その後、青年は都で学問を修めて故郷に帰る途中、ある村の家に泊めてもらった。すると、家の主人は自分の娘を青年の嫁にしようとした。美しい娘だったので、青年は結婚を承知した。

ところが、青年がその娘を抱いて寝ると腰に傷跡がある。聞けば、何年か前に刃を投げつけられて負った傷だという。青年はこれこそ自分が殺そうとした女だと知って、縁は変えられぬものと悟ったのだ。

「昔、唐の国でのこと」とあるので、話の舞台が中国であることは確かだろう。時代も場所もはっきりしないが、まさしく「赤い糸」の伝説である。話の筋立ては、「定婚店」「灌園嬰女」「閻庚」にそれぞれ似たところがあり、三者をこきまぜて潤色したかのような印象を受

ける。「赤い糸」の図式が明確に打ち出され、「赤い糸」の結ばれる部位もはっきり「足の指の先」と特定されている。この沖繩版の「赤い糸」の伝説と先行の諸話との関係は詳らかにしないが、類話が沖繩の諸地域に残されていることから見て、沖繩ではなかなか流布した話であったようだ。

果して、この沖繩版の「赤い糸」の伝説が、今日の日本人が抱く「赤い糸」のイメージへと直接に結びつくのかどうか。あるいは別の経路を想定すべきなのかどうか。おそらくは後者が有力かと思われるが、即断は慎むことにしよう。詳細については、今後の考察に委ねることとしたい。

### 結び

以上、「赤い糸」の伝説の類話を中国と日本から二つずつ紹介してみた。「赤い糸」と「縁」の観念の関係、「赤い糸」と同じ役割を果たす「細い繩」、「赤い糸」の結ばれる部位など、興味を引く点に事欠かない。地域としても、沖繩を視野に入れるべきことが明確になったと思う。

なお、余談ながら、「閻庚」の話に見える「細い繩」を結び替える発想は、人間として当然の心理的欲求から生じたものではないだろうか。すなわち、運命としての「赤い糸」の存在は認めるが、それによって完全に結婚相手が決められてしまうのではかなわぬ、といった心情である。結婚を必然の運命と見なすと同時に、その運命に抗って、なにかしかなる変更の余地を確保しておきたいとするのは、自然の人情であろう。どうやら「赤い糸」の存在は認めながら、その絶対性までは認めたくない、というのが人間の偽らざる心情なのではあるまいか。

これは現在の日本人にも当てはまるようだ。例えば、ある女性向け雑誌の「絶対ほぐせる! もつれたあなたと彼の「赤い糸」という特集記事<sup>(5)</sup>には、「赤い糸」の「へもつれ度」なるものが登場する。これは占星術「四柱推命」を用いて結婚星と恋愛星の組合せから「赤い糸」の「真相」を「究明」すると銘打つ記事であり、恋愛にかかわる当事者の振舞い如何で「赤い糸」が切れることもあるのだという。曰く「へもつれ度一五%」……あなたの赤い糸はちよつとのことではもつれない丈夫さです。それでも切れることがあるとしたら、原因はあなたの目移り&心変わり」「へもつれ度二〇%」……赤い糸もつれ度は低いのに、「へやめた」と切っては話になりません」「へもつれ度五%」……赤い糸がもつれやすい恋ですから、自分からヤになってプツツリ切ってしまうそう」等々。あたかも「赤い糸」を切る切らぬの選択権が当事者の女性にあるかのような錯覚を起こさせる点で、なかなか俗受けする記事である。結婚の神様も苦笑いしているに違いない。しかし、己れの自由意志によって運命をなんとか変更したいという願望をくすぐる点では、人間のある種の側面を垣間見せてくれる記事だと言ってもよいだろう。

こうしてみると、一見、現代の日本人とは無縁に映る「閻庚」の話も、あなたがち中国の荒唐無稽な昔話と踏み倒すわけにゆかぬかもしれない。

【注】

(1)拙著「縁」について——中国と日本（新典社、一九九〇年）七六頁、および本稿「四 日本人類話——その二」を参照。なお、一九九三年一月十一日（月）夜十時十一時に日本テレビの番組「ワンダーゾーン」で「赤い糸」の特集が放映されたとき、街頭で女性リポーターから「赤い糸」って何だと思いませんか?とインタヴューされた三十代と覚しき一人の日本人男

性が、すぐさま端的に「縁でしょうね」と答えていた。

(2)芳賀矢一「攷証今昔物語集」本朝部（下）五九一頁に、当該説話の類話として「続幽怪録」（「続玄怪録」の別称）から「定婚店」が節録されている。

(3)今、李諒と李復言が同一人物であるとの説（下孝萱「唐代文史論叢」所収「李諒与「続玄怪録」に従う」。

(4)「日本昔話通観」第二六卷「沖繩」篇（同朋舎、一九八三）三三二―三四頁を参照。

(5)「ノンノ」non・no一九九三年五月二〇日号、一四一―一四八／一五三―一六〇頁。